

大学と地域協働による「キー・コンピテンシー」の育成 —学生と共に創る「子ども向けイベント」を中心として—

齊藤 ゆか

1. はじめに

OECDは、1997年より DeSeCo(Defining and Selecting Key Competencies)プロジェクトに着手し、最終報告“Key Competencies for a Successful Life and a Well-Functioning Society”を2003年に公刊した。DeSeCoの使命は、これまでOECDがPISA調査(生徒の学習到達度調査)で国際的に測定・評価してきた読解、数学、科学といった認知的領域より、広い概念枠組みを提示し、新たな指標開発を導き出すことであった。ここでいう「キー・コンピテンシー(Key Competencies)」は、「認知的で実践的な技能、創造的な能力に加え、態度や動機づけ、価値観といった他の心理社会的な資源をも含んでいる(筆者訳)」ことである。また、各国間協議で打ち出されたキー・コンピテンシーの共通枠組みは、次の3つの柱である。すなわち、①相互作用にツールを活用する能力(Using Tools Interactively)、②異質なグループで協力し合う能力(Interacting in Heterogeneous Groups)、③自律的に行動する能力(Acting Autonomously)である(OECD2005a, ドミニク他2006)。これらは、今日日本の教育政策で重視された学校教育の「生きる力」、キャリア教育の「社会人基礎力」との共通点を多々含むものである。

そこで、本稿は、「キー・コンピテンシー」という新たな概念枠組みを高等教育にあてはめ、「キー・コンピテンシー」を育成する具体的な教育展開を導き出していくことを目的とする。高等教育に関しては、これまで、筆者の専門領域であるボランティアや生涯学習の観点からいくつかの研究発表を公表してきた。大学における授業研究に限定していえば、『「学社融合」社会における高等教育の役割』に焦点をあて、第1に、学生と地域を結ぶ意義を問い、第2に、サービス・ラーニングを導入した教育的展開のあり方を検討してきた(齊藤2006, 2007)。しかしながら、体験的・実践的授業を展開する場合、大学と地域とが連携した体制は不十分であり、「世代間交流」を促進するサービス・ラーニング等の新たな学習プログラム開発は課題として残されて

いた(齊藤2008a)。そこで、本稿は第3の研究として、大学と地域協働によって育まれる「キー・コンピテンシー」育成の可能性を検討するため、次の手順で研究を進めていきたい。まず、千葉県松戸市を中心とした大学と地域の協働に関する現状をおさえ、次に、体験と地域協働の手掛かりとして実施した授業とイベントの概況と評価を行っていく。その上で、大学と地域協働による高等教育の役割を提示していきたい。

2. 研究の視点と方法

大学と地域をつなぐインターフェースとして、「地域交流センター」や「大学ボランティアセンター」等の中間支援組織が、地域の重要な役割を果たしている。日本における「大学ボランティアセンター」等、多様な名称をもつ中間支援組織は約30校以上あるといわれるが、現在、詳細は、(独)日本学生支援機構(2009)で「2008年度大学等におけるボランティア活動の推進と環境に関する調査報告書」が発行される予定である。一方、「大学」「地域」「協働」の3つのキーワードをもつ先行研究は、日本の学術情報サイト Ciniiによれば、2008年8月現在、514件の論文が検索される。しかし、その殆どが2000年以降の新たな研究成果であることが分かる。そこで筆者も、上記キーワードを考慮にいれつつ、研究を進めていくこととする。尚、本研究の考察は、千葉県松戸市の実践事例を対象に参与観察で得られた情報に基づくものであることを付記しておきたい。

3. 大学と地域協働による事業経緯と学生の社会参画力の育成

(1) 大学と地域協働によるこれまでの事業展開と課題

大学と地域との協働推進や、大学で体験的・実践的な授業を取り入れようとする場合、学外における学習環境が整っていることが必須である。しかし、本学に限定していえば、地域貢献の大半は、学内の施設開放(音楽会や講演会

等で使用できる大ホールも含む)や、社会人向け教育サービスの提供といった一方向のサービスが中心となる。

一方、1998年設立から10年目を迎えた本学生涯学習研究所では、これまで「生涯学習まちづくり」を中心とした多くの社会貢献事業を手がけてきた。特に、2003年～2007年度までの5年間、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業学術フロンティア推進事業(テーマ「生涯学習の観点に立った『少子・高齢社会の活性化』に関する総合的な研究」)に採択された。同事業に基づき、学内外で大規模な研究と実践を進め、筆者もその総括の役割を担ってきた。それらの成果は、既に生涯学習研究所(2008b)で詳述したが、いくつかの課題も残されている。その一つが、本学の地元となる千葉県松戸市を拠点とする大学と地域を結ぶインターフェース機能の強化である。あえていえば、2006年に大学と商工会議所とが提携を結ぶ「聖徳ピーシーズ」が立ち上がり、松戸市内外のマスコミ等でも話題となった。しかしながら、学生ヒアリングによれば、2008年現在、筆者が所属する生涯教育文化学科の学生が中核となって活動しているものの、地域からの要求の多さに小規模学科の学生のみでは対応しきれず、苦慮していると聞く。また、活動そのものは、あくまで学生の主体性に委ねるものであり、地域に目を向ける学生に対する支援が学内外で組織化されているとはいえない。

(2)「地域子育て学ネットワーク研究会(仮称)」の立ち上げと経過

上記の現状から、大学と地域とが協働したインターフェース組織の必要を痛感していた。同時期に、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業社会連携推進事業「連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する研究」のうち、「若者と地域交流」(第3プロジェクト・代表佐藤三郎教授)の一環とする研究の要請もあった。そこで、大学と地域協働の手がかりとして、「地域子育て学ネットワーク研究会(仮称)」¹⁾(以下、「地域ネットワーク」略記)を実験的に立ち上げることとなった(写真1)。

本研究の趣旨は、学生の社会参画力を育成するために、地域や子育て関係団体に着目し、そこでの実践を通じて、産学官民・学生のすべてが連鎖的に子育てのまちづくりに参画できる仕組みを構築することにある。それら具体的な手順として、第1に、社会参画力促進プログラムの作成をすること、第2に、「地域ネットワーク」の立ち上げ、実践による効果や課題を把握すること、第3に、学生の社会参画力を促進する条件整備を実践的に行うこと。具体的には、学内外向けビデオ作成やHP等の情報ネットワークの充実

である。これら具体的なアクションを通じて、学生が地域に参画し、子ども・親・学生・市民が相互にネットワークを構築していくことを仮説としている。

「地域ネットワーク」は、2008年3月から月1回の定例研究会として始動した。しかしながら、立ち上がり当初は、学外への研究協力や事業趣旨への理解の統一が困難を極めた。その理由は、次のことが考えられる。まず、「大学と地域協働」を進めようとする場合、本学にとっての協力要請ばかりでなく、双方向のメリットを生むものでなければ、行政や民間組織への理解は得られないこと。そもそも学外でこうした研究実践を行う緊急性はないからである。次に、「地域ネットワーク」に協力要請した民間組織は、筆者がこれまで何らかの関与をもっていたNPOであったものの、各々のNPOは既に年度計画があり、新たな事業を無償で加える余地は残されていなかったこと。また、「地域ネットワーク」の運営委員への依頼は、各部署の行政課長や事務局長、NPO理事長等に行ったため、実質的に実働困難なメンバーであった点が挙げられる。研究会の中では、「既にある子ども関係のネットワークや各々のNPOの事業に、学生ボランティアが協力するべきだ」「学生をもっと地域に関与させ、ボランティアとしての活動の場を与えてほしい」との意見が寄せられた。全国の草の根NPOが抱える人手や予算不足といった課題から考えれば、当然ともいえる発言であろう。最後に、本事業はトップによる要請ではないため、「大学と地域協働」の方針や着地点が見えづらいということ。そのため、研究会の参加者の多くが、「研究のための研究には協力するつもりはない」、「何のための『地域ネットワーク』なのか」等の疑問に対して、筆者自身も明確にできなかったことが問題であったといえよう。

上記の現状から鑑みて、今年度前期(4月～7月)は、本学の協力に応じてもらえる組織と参加者とのかわりの中



写真1 「地域子育て学ネットワーク研究会」の会議の様子

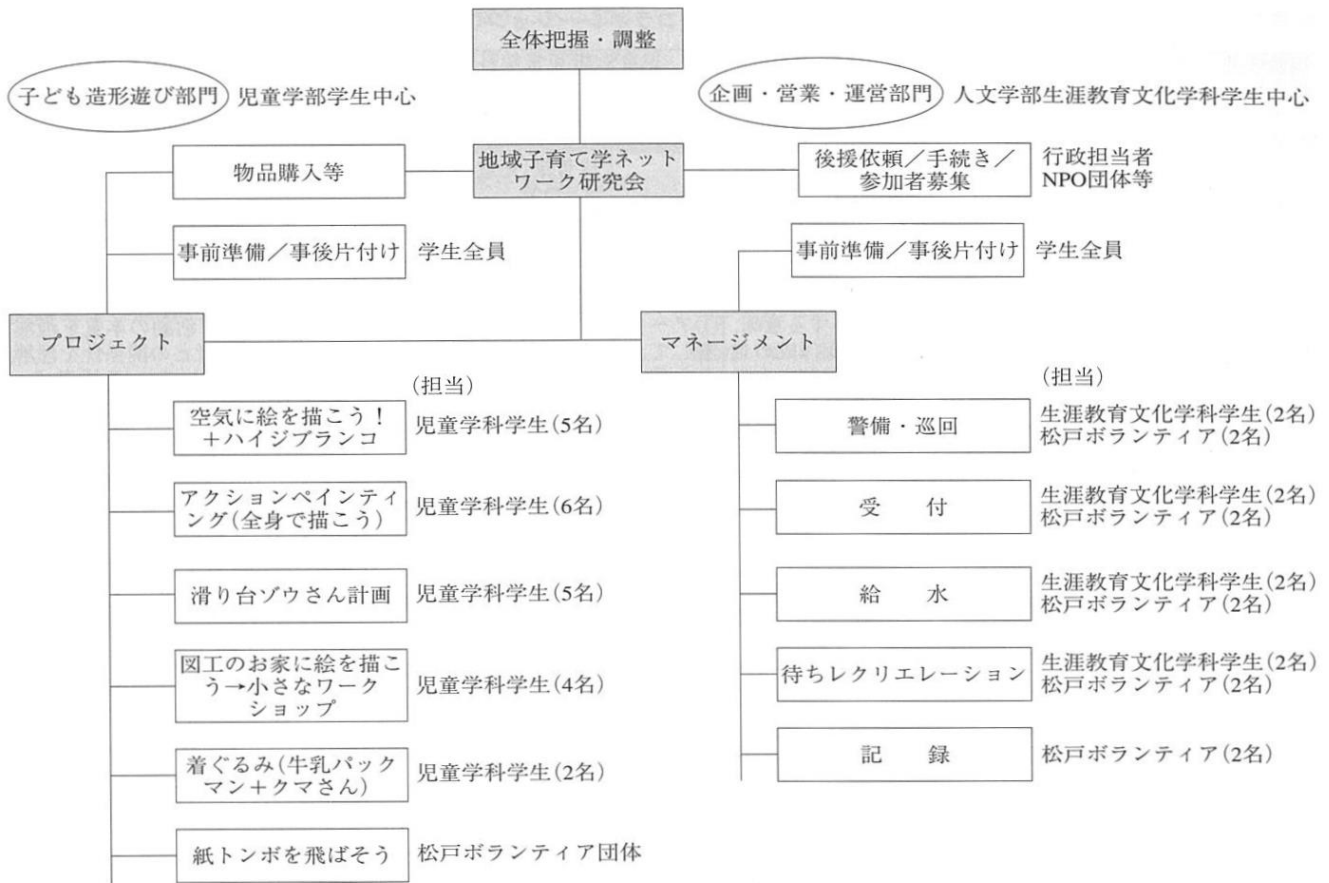


図1 「集まれ！アートパーク」における組織図と担当者の構成
注：「アートパーク」の当日スタッフ資料から、筆者加筆。

で、テーマ性を設けた学生の社会参画力促進プログラムを
実践・研究することからスタートすることとした。本稿は、
前期中に行った実践研究の枠組みと事業成果を中心に、論
を進めたい。

4. 学部を超えた授業のコラボレーション —子ども向けイベント「集まれ！アートパーク」 を中心に—

(1) 子ども向けイベント「アートパーク」の構想

学生の社会参画力育成の一つの手がかりとして、下記の
要領でイベントの開催を行った。本イベントの趣旨は、ア
ートを中心とした地域の子どもたちに遊び場を提供すると
共に、学生の社会参画力を養うことにある。子ども向けイ
ベント「集まれ！アートパーク—公園改造計画—」(以下、
「アートパーク」略記)は、2008年7月20日(日)に、松戸市
中央公園で実施した²⁾。「アートパーク」のプログラム³⁾の詳細
は大成(2008)によるが、組織図は図1のようになる。

今回実施したイベント「アートパーク」の特徴は、次の点
にある。

第1に、イベントの対象は、子どもや親を視野に入れて

いるが、その内容は、誰もが楽しめる「アート」というテ
ーマ性を設定したこと。また、「子ども遊び」を専門とする教
員と「アート」を専門とする教員の各々の協力が得られたこ
と。第2に、イベントの運営主体を学生におき、イベント
の準備プロセスそのものを大学の授業内に設置したこと。
また、授業は、児童学部児童学科と人文学部生涯教育文化
学科との学部を超えたコラボレーションで行ったこと(以
下、児童学部児童学科を児童、人文学部生涯教育文化学科
を生涯と略称)。第3に、イベントの場は、本学の施設では
なく、市民に親しまれる大学近隣の公園を使用したこと。
第4に、イベントを通じて、相互に立場や年齢の異なる
人々が、時間と空間を共有できたこと。これまで、「世代
間交流」をプログラム化しようとする場合、相互の異なる
立場の者同士をつなぐ、具体的なツールが必要であったこ
とは既に指摘している点である。第5に、大学主導のイ
ベントではあるが、大学と地域とが協働できる場面を設定し
ようと試みたこと、である。

(2) 授業実践の設定意図—授業のコラボレーション—

ここでは、本稿で分析を試みた授業実践の設計意図と概

表1 学部を超えた授業のコラボレーション(授業概要)

開設学部・学科及び年次 授業科目名	人文学部 生涯教育文化学科 2年		児童学部 児童学科 3年		全学部全学科 全学年		
	大学の地域交流と社会貢献		3年次ゼミ(図画工作)		人間の心と生き方—ボランティアをキャリアに活かす—		
担当教員 今年度履修者数 単位数/授業期間 必修・選択/共通・専門等の別 授業区分	齊藤ゆか(生涯), 神谷明宏(児童) 9名 2単位(前期・後期) 必修・共通 演習		大成哲雄(児童) 22名 2単位(前期・後期) 必修・共通 演習		齊藤ゆか(生涯) 82名 2単位(前期) 選択・教養 講義		
授業目的	①学生が地域貢献に関与する意味。 ②大学から発信する学生作成の地域新聞を作成する。③子どもを地域に参画させる方法やプログラムの立て方、地域の連携方法、PR方法等を学び、地域交流の実践を行う。		①アートプロジェクトの趣旨を理解して、イメージを形にしていく力を養う。②学生が目的に向かって協力し、主体的に動ける力を養う。③学外で実施することで社会とかわかり、社会の構成員としての自覚、異世代との交流を行う。④子どもにとっての造形活動の重要性を理解する。		①ボランティア活動の本質を理解して、自己と他者との関係性を理解する。②ボランティア活動を、「探す・みつめる」「人と出遭う」「体験する・考える」プロセスを体感する。③ボランティア活動を通じて、現代社会における課題を理解し、自己を見つめなおすことによって、「今の自分に何ができるか」考える力をはぐくむ。		
授業内容(日時) (シラバス添付可能)	1	ガイダンス	(4/16)	ガイダンス	(4/17)	ガイダンス	(4/16)
	4月	地域子育て学ネットワーク	(4/11)	地域子育て学ネットワーク	(4/11)	地域子育て学ネットワーク	(4/11)
	2	地域社会貢献を重視する大学	(4/23)	新聞紙ワークショップ	(4/24)	自分探しの旅—これまでの自分の生き方を振り返る—	(4/23)
	3	子どもむけイベントの実際	(4/30)	企画プレゼンテーション	(5/1)	必要とされる大人ってどんな人?—意味ある自分に出遭う—	(4/30)
	4	会場となる公園を事前調査	(5/7)	企画決定・役割決定	(5/8)	社会における現代的課題を考える①—新聞・雑誌を通じて課題をみつめる—	(5/7)
	5月	地域子育て学ネットワーク	(5/9)	地域子育て学ネットワーク	(5/9)	地域子育て学ネットワーク	(5/9)
	5	イベントの書類制作と仕事分担	(5/21)	制作と実験	(5/15)	ボランティアマナートレーニング①	(5/21)
	6	イベントの広報	(5/15)	制作と実験	(5/22)	ボランティアマナートレーニング②	(5/15)
	7	広報制作	(5/28)	制作と実験	(5/29)	ボランティア活動を実践する前(事前学習)	(5/28)
	8	イベント趣旨の確認と地域連携	(6/4)	制作と実験	(6/5)	ボランティア活動者との出会い(I地域とのかかわり)	(6/4)
	9	広報制作の評価と広報エリアの決定	(6/11)	制作と実験	(6/12)	ボランティアの体験(II異世代とのかかわり)	(6/11)
	6月	地域子育て学ネットワーク参加	(6/13)	地域子育て学ネットワーク参加	(6/13)	地域子育て学ネットワーク	(6/13)
	10	緊急時における対策と各役割	(6/18)	全員で造形あそび実験	(6/19)	ボランティアの体験(III社会とのかかわり)	(6/18)
	11	各役割の進行状況の確認	(6/25)	全体フラッグ等の制作	(6/26)	ボランティア体験活動の振り返り(事後学習)	(6/25)
	12	当日スタッフのマニュアル作成	(7/2)	イベント準備	(7/3)	社会における現代的課題を考える②—課題を解決するために自分のできること—	(7/2)
	13	当日スタッフのシフト表の作成	(7/9)	イベント準備	(7/10)	社会における現代的課題を考える③—課題を解決するために組織のできること—	(7/9)
7月	地域子育て学ネットワーク参加	(7/11)	地域子育て学ネットワーク参加	(7/11)	地域子育て学ネットワーク	(7/11)	
14	事前準備	(7/16)	公園で予行演習	(7/17)	ボランティアを自分のキャリアに活かそう①	(7/16)	
7月	アートパーク当日	(7/20)	アートパーク当日	(7/20)	アートパーク当日	(7/20)	
16	振り返り	(7/24)	反省会	(7/24)	14. ボランティアを自分のキャリアに活かそう②	(7/24)	
授業の評価方法	レポート/学生の積極性/出席率		前後期で評価(前期:レポート/学生の積極性)		レポート3点/出席率		

注:授業のシラバスに加筆の上,筆者作成。

要を述べておきたい。授業実践の概要は、表1に示したとおりである。本授業は、最終的な着地点を「アートパーク」の開催に目標を定め、授業の展開は、各々の学習目標に従って役割を分担していった。実際、「アートパーク」に向けた学生指導にあたったのは、筆者を含めた本学教員3名⁴である。各々の専門領域が異なることで、結果的に指導における役割分担が可能となった。また、「アートパーク」の物品購入や予算等の手配は、本学の大学事務局の協力を得た。

図1のように、児童の学生は、「アート」を中心とする子ども造形遊びのプログラム開発と子どもたちへの指導を行う。また生涯の学生は、地域に密着した子ども向けプログラムの企画に関与し、イベントを開催するための運営(渉外, チラシづくり, 営業, 準備)に携わる。筆者は、主に後者の学生指導に関わり、双方の授業の進捗状況を定期的に確認した。

一方、学外との関わりにおいては、大学と地域とのツールとして、「地域子育て学ネットワーク」に協力を要請した。また、表1の教養科目「人間の心と生き方」の授業の一部においては、NPOや市民団体(民:共的セクター)の代表にボランティア講師として協力してもらい、学生と地域ボランティアとが出会える場を提供した。このことで、産学官民連携というポーズを保ち、かつ、学生が地域にボランティアとして活動する場が広がった。しかしながら、イベントの後援依頼や公園の貸し出し等の申請手続き、子どもたちへの参加の呼びかけ、当日ボランティアとしての協力に関しては、「地域ネットワーク」との連携はあったものの、企画や準備の段階での協働には至っていないのが現状である。

(3)地域における「アートパーク」への評価

「アートパーク」における当日の参加者は83名(うち、子ども53名、保護者30名)であった。これに対し、イベントの準備・運営を手がけるものは、計49名であった。その内約は、学生は31名(児童22名、生涯9名)、教員3名、助手3名(児童2名、生涯1名)、当日地域ボランティア12名である。

まず、参加者からの評価を、当日配布した調査結果(対象:保護者29名)から簡略的に示しておきたい。まず、「アートパーク」そのものに対するイベントは、「楽しかった」との回答が97%、「今後も参加したいか」についても97%の希望があった。普段、アートで遊ぶことのない子ども(62%)に対して、親は「アートパーク」をどのように評価していたのであろうか。その意見を整理すると、大半の参加

者が「アートパーク」を通じ、「のびのび」「いきいき」「自由に」「制限なく」「ダイナミックに」「型にとらわれず」「お手本がなく」「親子で楽しめる」と高く評価していた。特に、子ども自身の「個性を伸ばせる」「長所を発揮できる」等、情操面での向上に役立つこと等が明記されていた。また、「アート」は、「親が不得意とする」ことであり、普段、「家庭では汚れることを気にする」等の記述が挙げられていた。このことから、子どもの自由な戸内・戸外の遊びの充実と支援がいかに重要であるか、について再認識させられた(写真2, 3)。

一方、「若者と地域交流」「大学と地域協働」に対しては、「地域に開かれた大学」「世代の人との交流」「学生は生きた知識を学べる」等その期待も高い。今後のイベントに対しては、「家では体験できないイベント」「学生と地域が共につくるイベント」「体験型イベント」「造形(粘土・工作)」



写真2 「集まれ!アートパーク」の参加者と記念撮影



写真3 子ども達と待ちレクリエーションを学生がパフォーマンス

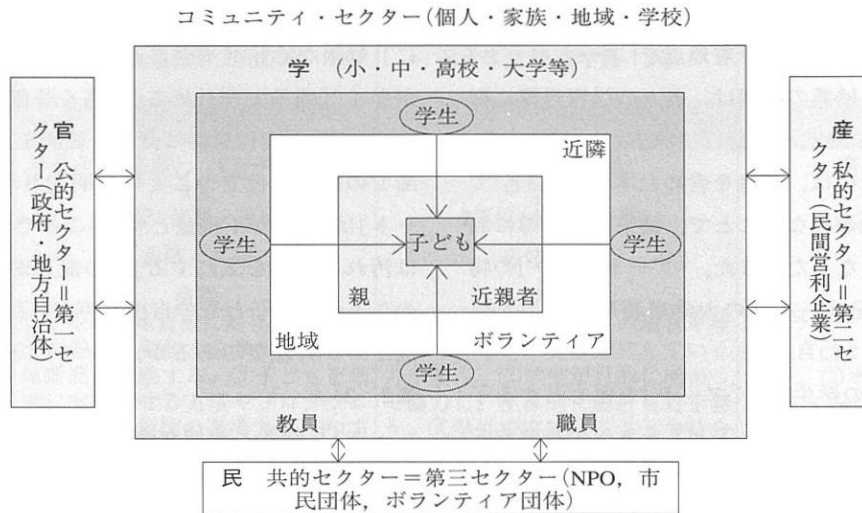


図2 子ども・親・学生・市民が連鎖的に「子育てまちづくり」に参画する構造
注：筆者作成。

「歌・楽器演奏」「エコや廃材を使った大型の造形や手作り楽器等の演奏」等、期待も高いようである。

以上から、本イベントによって、図2のように、大学・行政・民間ボランティア団体が連携し、子ども・親・学生・市民とが連鎖的に「子育てまちづくり」に参画する仕組みを作り出すことが可能となっている。「アート」という創造的かつ開放的な遊びを通じて、子どもと大人、子どもと学生、大学と地域とが非日常的に関わりあえる一つのツールとなっていることが理解できる。しかしながら、これが一過の事業に過ぎず、日常的な関わりではない。こうしたイベントを実施するには、そのための準備や予算等も要する。これに対し、高等教育機関は、一イベントに対して、学生がどの程度の学習効果を挙げたか、その評価と課題を明示する必要がある。また、図2の産学官民のそれぞれのセクターがいかに「子育てまちづくり」に関わり、支援しているかが要となるが、この点については別稿に譲りたい。

(4) 学生の「キー・コンピテンシー」の育成と課題

ここでは、冒頭に記した「キー・コンピテンシー」に基づき、学生の学習効果について評価していきたい。図3は、「大学の社会貢献と地域交流」の授業の最終日に、イベントの振り返りを行った際、学生の記述に基づき、「キー・コンピテンシー」の傾向別に分けたものである。

まず、図3によれば、「キー・コンピテンシー」の1点目「相互作用にツールを用いる能力」については、「技術を相互作用に用いる」手段として、当日の役割分担や時間等の進捗状況が記されたスタッフ用の「資料づくり」が挙げら

れた。また、参加者への「広報づくり」も授業内で実施した有効な学習内容であると考えられる。これら資料の大半は、パソコンを駆使して作成した資料であるため、そのツールとして「情報機器」の活用が挙げられる。

2点目の「**真質なグループで協力し合う能力**」に関しては、一番多くの記述がみられた。特に、「他者との関係をよりよくすること」や「協力する、チームで働く」ための意図的な訓練の場として、一つの目的達成のために、体験的な学習プロセスを踏むことによる学生の能力向上には成果があるものと思われる。「他者との関係をよりよく」する方法は、これまでの本人の性質・気質によるものが大きいとはいえず、他者との関係性を保持する努力を意識的・継続的に行うことは、学生自身の人格形成にも影響を与えるものである。また、「チームで働く」ためにはまず、「コミュニケーション」や、「連絡」、「確認」を常に取り合う必要が再認識することができる。また、「人任せにはしてはならない」「嫌だ。やりたくないと思ってみんながやればよい」と思う自分との葛藤に向き合う場面もみられた。

さらに、3点目の「**自律的に行動する能力**」には、「大きな実態の中で活動する」ために、「全体の進捗状況の確認」、「積極的に」、「自ら行動する」、「挑戦する」、「自分自身で考える」試みが重要である。また、「プロジェクトを設計し、実行する」には、短い期間で準備を進めるため、「活動の優先順位をつけること」や「イベント企画に際する下調べ」、「最後までやり遂げようとする」意志も重要な要素となる。さらには、「要求を守る」ためには、「緊急事態への対応」や「警備」「会場チェック」等も、子どもイベントには欠かせない点であろう。

キー・コンピテンシー		能力1	能力2	能力3	能力4	能力5	能力6	能力7	能力8	能力9	能力10	
相互作用に道具を用いること	1	言語, 記号, テキストを相互作用に用いる										
	2	2-1	2-2	2-3								
	知識や情報を相互作用に用いる	必要な情報を集める(2)	情報機器が使えるようになった(2)	エクセルで表を作れる								
	3	3-1	3-2	3-3	3-4	3-5	3-6	3-7				
技術を相互作用に用いる	資料づくりができる(8)	広報(ポスター/チラシづくり)ができる(4)	人前で説明できる/プレゼンできる(4)	レクリエーション指導力(2)	公園・備品の申請の仕方(1)	子どもが安全に遊べるための公園整備(1)	紙トンボを飛ばす力(1)					
異質なグループで協力し合うこと	4	4-1	4-2	4-3	4-4	4-5	4-6	4-7	4-8	4-9		
	他者との関係をよくする	参加者に感謝する心と思いやりをもてる(4)	笑顔を忘れない(2)	誉めあうことができる(2)	大勢に声かけできる(2)	色々な種類の人がいることを理解できる(2)	人を楽しませることができ(2)	先入観をあまりもたない(1)	文句を言わない(1)	顔が広い(1)		
	5	5-1	5-2	5-3	5-4	5-5	5-6	5-7	5-8	5-9	5-10	
	協力をし、チームで働く	連絡をしっかりと取り取る。不明点は確認できる(8)	コミュニケーション力(人に伝える/頼む/動かす)(6)	子どもの接し方。参加者に対する対応できる(4)	みんなで協力・連携をとれる/チームワーク(4)	周りの人との協調性をもてる(3)	分からないことや疑問点を解決できる力(2)	一人一人の個性を認め、仲間にできる(2)	人に役割を振り、一人ではやらない(2)	外渉の範囲の絞り方/営業(人へのお願いができる)(2)	指示が出る(2)	
	6	5-11	5-12	5-13	5-14	5-15						
	軋轢を制御し、解決する	イベントを成功するための雰囲気づくりができる(2)	複数の人と話るとめることができる(2)	企画を裏で支えることの大変さを理解することができる(1)	やりたくないことやらせないといけない(1)	人任せにはしてはならない(1)						
自律的な行動をとること	7	7-1	7-2	7-3	7-4	7-5	7-6	7-7	7-8	7-9	7-10	
	大きな実態の中で活動する	全体、進捗状況を把握すること(12)	積極的に行動する力/挑戦する力(10)	自分自身で考える力/思考力(5)	小さなことに気をつける能力がある/周囲を観察できる(4)	臨機応変に対応することができる(4)	物品配分の配置ができる(1)	緊張感を持つ(1)	自己管理はできる(1)	客観性をもてる(1)	視野が広くもつことができる(1)	
	8	8-1	8-2	8-3	8-4	8-5	8-6	8-7	8-8			
	ライフプランやパーソナルプロジェクトを設計し、実行する	活動に優先順位をつけることができる(6)	イベントの企画をつくる(下調べ、プロセス)(5)	最後までやり遂げる力をもつことができる(4)	事前準備の重要さを認識することができる(2)	成功するという気を持つことができる(2)	責任感をもてる(2)	達成感を感じることができる(2)	イベントに対する熱い気持ちをもてる(2)			
9	9-1	9-2	9-3									
権利や利益、限界や要求を守り、主張する	緊急事態に対応することができる(2)	警備で危険なところをみつけることができる(1)	会場チェック(園内の資材と水場等)することができる(1)									

図3 「キー・コンピテンシー」の傾向別に見た、「アートパーク」によって身につく能力・技術

注1：能力の内容は、学生の回答に基づくが、筆者が整理・加筆あり。
 注2：行は、該当人数が多かった順である。()内は、該当者数を示す。
 注3：灰色部分は、該当者数が5名を超えた場合。

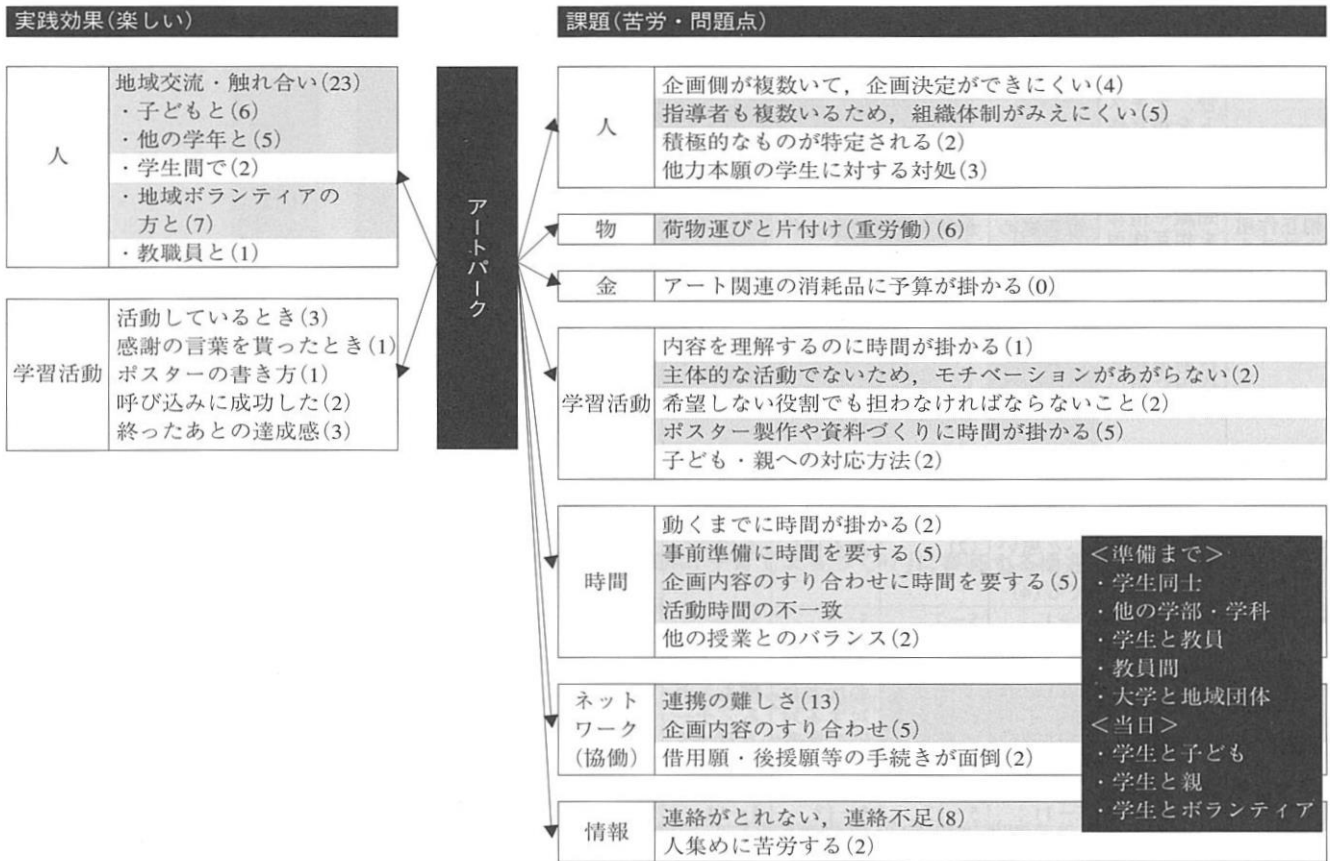


図4 「アートパーク」における学習効果と課題(生涯教育文化学科の学生のみ)

注：生涯教育文化学科学生の意見(9名)を対象として筆者作成。
()内は、該当人数を表す。5名以上は灰色部分にした。

一方、図4は、「アートパーク」に関する明暗事項を、学習資源である「人」、「物」、「金」、「時間」、「情報」、「ネットワーク(協働)」の視点から学生が評価したものを構造化したものである。これによれば、学生が「楽しい」と思える場面は、「人」との関わりのあるときであり、イベントの終了時の達成感を味わったときである。これに対し、学生が「苦慮」したのは、「時間」や「情報」の調整と「協働」の場面においてである。特に、今回実施したイベントに際しては、多様な組織と授業が複雑に関与していたため、学生にとっては組織形態が見えにくく、企画決定しにくい場面が多くみられた。また、学生自身の時間的な問題、児童と生涯との学生に分離した授業進行であったため、学部間の話し合いの「時間」が殆どとれないまま当日を迎えることとなった。これらは、指導体制の問題もあるが、大学と地域協働、すなわち「地域ネットワーク」が実質的には容易くないことが理解できる。今回のイベントを通じ、人と人、組織と組織をつなぐコーディネーターの存在の重要性を認識した。

以上から、先に挙げた「アートパーク」の特徴5点を、学習面に引き付け再評価しておきたい。

第1に、イベントのテーマ性に関しては、先述したように子どもの情操面で高い評価を得た。しかし、予想を上回る労力と時間や、予算が掛かるため、今後の活動の継続が可能かどうかは検討を要する。第2に、イベントの学習プログラムに関しては、図3のように、「キー・コンピテンシー」のうち、「異質なグループで協力し合う能力」や「自律的に行動する能力」を促進する学習プログラムに役立つことが理解できる。しかし、指導面においては、イベントの規模と授業との兼ね合いを再検討した上で、短期・中期・長期によって具体的に目標を組み換えた学習プログラムの形成が重要である。第3に、イベントの場を「公園」にしたことで、大学近隣の公共の場(公園)に目を向けるきっかけとなり、子どもが遊ぶ空間を考える学習の場となった。特に、子ども・親・学生・地域の方々双方に、「公園で」開放的な空間を味わうことが可能となった。第4に、イベントを通じて、学生が地域に参画する場面を与えたことである。とりわけ、準備プロセス及びイベントの当日における、子ども・親・学生・地域の人々が相互に係わり合い、世代間の交流を行うことで、協働・共創という主目的を達成できた

のではないと思われる。そこで、次項では、最後の課題「大学と地域協働」の可能性を検討してみたい。

5. 大学と地域協働の可能性

高等教育機関での研究は、これまで地方より国際的あるいは全国的な視野に向けられていた。とりわけ、地方再生や地域経済に関して、たいていの高等教育では受身的なアプローチをとっていた。しかしながら、グローバル化における経済と政治の再編等の要因から、今日における高等教育機関は「グローバル化とローカル化(globalization and localization)」の両役割が問われている。特に、活動のポータルはグローバルからローカルへ移行し、地域ガバナンスの新しい形態の生成に期待が高まっている(OECD2005b)。

地域と連携する大学は、「学習地域(learning region)」と呼ばれ、広範で文化的な発展に向けた施策がダイナミックに結びつく傾向にある。日本でも、地域経済の新たな現実に対応する大学の試みが既に数多く発表されている(坂田他2001, 広島大学経済学部附属地域経済システム研究所センター2002, 高崎経済大学附属産業研究所2003, 濱田2007, 大宮・増田2007)。こうした「学習地域」を促進していくには、「高等教育機関や、その教職員、学生を含めて、地域に関わる人々を結集して、政策や文化等広く地方の指導性を促す学習ネットワーク」の構築が重要課題である、とOECD(2005b)は指摘している。

筆者も本学に就任して以来、地域を教育活動の資源として活用する学習方法を検討してきた。特に、「ボランティアによる教育力」に期待し、学習経験の少ない学生に、多くの活動を意図的に提供してきた。また、「地域ネットワーク」の実験的な立ち上げも行った。

しかしながら、「大学と地域協働」というテーマを掲げたものの、未だ数多くの課題を打開できないまま今日に至っている。この大きな要因は、これまでの大学の伝統的構造(大学と地域の関係性やカリキュラム上の問題)と無関係ではない。また、一地域の学習経験は、複数地方出身の学生の関心を引きにくい。また、多くの資格を取得しようとする学生の授業カリキュラムは、時間的な余裕がなく、授業外活動(学校外の社会的活動やボランティア活動)にも限界がある。こうした理由から、高等教育機関は、地域での活動や学習ネットワークの形成に限られた役割しか果たせないだろうと思われる。

しかしながら、今後、「学習プロセスを地域化」する傾向が強まる方向にあるのであれば、学内の教育課程及び学外において、どのような仕組みと学習環境の整備をすべきか

検討が必要である。特に、全国的な広がりをもせる地域を基盤とする「サービス・ラーニング」等を充実していくには、次のような具体策が必要だと考えられる。

第1に、学生の学習をサポートする、大学と地域とが協働できる中間支援組織の整備である。例えば、学内に「ボランティアセンター」や「地域交流センター」等を設置し、学外に「大学コンソーシアム」(松戸/東葛エリア)の組織化も考えられる。

第2に、地域情報のネットワーク化(HPの充実/ニューズレターの活用/メディア媒体との連携)を促進し、大学と地域とが相互に情報交換できる仕組みをつくること。その際、アクションリサーチ法等により、地域ニーズを十分に把握する必要があるだろう。

第3に、「サービス・ラーニング」に関連した学習プロセスと活動の成果を持続的、継続的に、質・量の両面から評価することである。その手がかりとして、本稿で用いた「キー・コンピテンシー」は、学生の社会参画力を図る重要な評価軸になり得るとと思われる。

今後は、複数の地域と比較検討しながら、本研究も継続して、「大学と地域協働」の意義を明らかにしていきたい。

謝辞

本研究は、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業(社会連携研究事業)「連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する研究」(研究代表者：聖徳大学副学長松島鈞教授)のうち、「若者と地域交流」(第3プロジェクト・代表佐藤三郎教授)の一環とする研究である。ここで、本研究にあたり貴重なご意見を頂いた本学の佐藤三郎教授、神谷明宏准教授、大成哲雄講師をはじめ、地域子育て学ネットワークのメンバーの皆様に心より感謝申し上げます。

注

- 1) 同ネットワークの運営委員は、産学官民が相互に関係性を構築できるメンバーにした。まず、学においては、本学の佐藤三郎教授を始め、神谷明宏、大成哲雄、齊藤ゆか(事務局)を司る。官においては(松戸市教育委員会、松戸市協働推進課、松戸市児童福祉課、松戸市社会福祉協議会)、民においては、まつど市民活動サポートセンター、子ども関係のNPO(5団体)が関与した。現段階においては、企業との関わりはないがメンバーは常に流動化している。
- 2) 主催は「聖徳大学」であるが、共催を「地域ネットワーク」、後援を松戸市、松戸市教育委員会、松戸市社会福祉協議会にそれぞれ依頼した。
- 3) 第1に、子どもたちが普段遊ぶ空間である公園を使用して、学生と子どもたちがアートの空間を創出すること。第2に、色々な素材を使って、子どもたちに工作のワークショップを行うこと。子どもなら誰でもできるイベント、第3に、子ども遊びへの支援を、本学学生が中心となって行う。
- 4) ①美術教育専門の児童学部の大成哲雄講師、②子ども遊びを専門とする児童学部の神谷明宏准教授、③ボランティアや生涯学習を専門とする人文学部生涯教育文化学科の筆者

である。

引用文献

- ドミニク・S・ライチェン, ローラ・H・サルガニク(2006)『キー・コンピテンシー—国際標準の学力を目指して—』明石書店.
- (独)日本学生支援機構(2009)「平成20年度大学等におけるボランティア活動の推進と環境に関する調査報告書」発行予定.
- 濱田康行(2007)『地域再生と大学』中央公論新社.
- 広島大学経済学部附属地域経済システム研究所センター(2002)『地域政策の道標—地方分権時代の協働社会づくりと地域の自立—』ぎょうせい.
- OECD(2005a)“The Definition and Selection of key Competencies Executive Summary”
[http://www.pisa.oecd.org/dataoecd/47/61/35070367.pdf#search=key competencies definition](http://www.pisa.oecd.org/dataoecd/47/61/35070367.pdf#search=key%20competencies%20definition)
- OECD(2005b)『地域社会に貢献する大学』玉川大学出版部.
- 大宮登, 増田正(2007)『大学と連携した地域再生戦略—地域が大学を育て, 大学が地域を育てる—』ぎょうせい.
- 大成哲雄(2008)『『集まれ! アートパーク公園改造計画』にみる,

- 教員養成大学における『アートプロジェクト』の可能性』『(FD紀要)聖徳の教え育む技法』No.3, 聖徳大学・聖徳大学短期大学部, pp. 35-47.
- 齊藤ゆか(2006)『『学社融合』社会における高等教育の役割(その1)—学生と地域を結ぶ意義—』『(FD紀要)聖徳の教え育む技法』聖徳大学・聖徳大学短期大学部, 2006.12, pp. 51-60.
- 齊藤ゆか(2007)『『学社融合』社会における高等教育の役割(その2)—サービス・ラーニングを導入した教育的展開のあり方—』『(FD紀要)聖徳の教え育む技法』No.2, 聖徳大学・聖徳大学短期大学部, pp. 69-82.
- 齊藤ゆか(2008a)「高等教育機関における世代間交流システムの検討—米国の世代間交流プログラムに学ぶ—」『聖徳大学生涯学習研究所紀要』6, 2008.3, pp. 59-67.
- 齊藤ゆか(2008b)「大学ボランティアセンターの取り組みと支援方策—大学と地域の協働のために—」『大学と地域の協働』聖徳大学生涯学習研究所所収, pp. 45-72.
- 坂田一郎, 藤松健三, 延原誠市(2001)『大学からの新規ビジネス創出と地域経済再生—TLOとビジネスインキュベーターの役割—』経済産業調査会.
- 高崎経済大学附属産業研究所(2003)『大学と地域貢献—地方公立大学付設研究所の挑戦—』日本評論社.